

上野 東叡山 寛永寺 特別拝観 報告

寛永寺は、慶応4年2月（1868年3月・のちの明治元年）に、江戸幕府第15代将軍・徳川慶喜が、朝廷に恭順の意思を示すため、当時の寛永寺の子院・大慈院において、蟄居謹慎した場所です。

一方、戊辰戦争から江戸の町を救うため、江戸城の幕府陸軍総裁・勝海舟が、寛永寺の徳川慶喜公に何度も使者を立て、慶喜公の意思確認しました。

徳川慶喜公の思いを一番理解していたのが、勝海舟だと思われます。

寛永寺管主のお話では、現在の寛永寺に移築してある「葵の間」で、蟄居謹慎した慶喜公は、ちょうど二カ月間ここに居たあと、戊辰戦争の前線を回避するため、一旦仙台に逃れたあと、生まれ育った水戸（父は水戸9代藩主・徳川斉昭）に戻って、過ごすことになったとのことでした。



そもそも、寛永寺は寛永二年（1625年）江戸初期に、慈眼大師天海大僧正によって創建されました。あの、天海和尚です。徳川家康、秀忠、家光公の三代にわたる将軍の帰依を受けた天海大僧正は、徳川幕府の安泰と万民の平安を祈願するため、江戸城の鬼門（北東）にあたる上野の台地に寛永寺を創建しました。

これは平安の昔（9世紀）、桓武天皇の帰依を受けた天台宗の宗祖伝教大師最澄上人が開いた比叡山延暦寺が、京都御所の鬼門に位置し、朝廷の安穩を祈る鎮護国家の道場であったことに、なったものです。そこで山号は東の比叡山という意味で東叡山とされました。さらに寺号も延暦寺同様、創建時の元号・寛永を使用することを勅許され、寛永寺と命名されました。（寛永寺HPの解説より一部抜粋）

江戸中期の享保時代（1716－1735年）に境内の敷地は、現在の上野公園すべてだけでなく、不忍池もふくむ広大な範囲でした。

現在の寛永寺の本堂・根本中堂は、東京芸術大学音楽学部の裏手にありますが、上野公園内の清水堂、弁天堂などのにぎわいに比べ、本堂周辺は、ひっそりして訪れる人もまばらです。幕末当時の寛永寺・根本中堂の建物は、現在の場所とは異なり国立博物館あたりに位置し、明治元年の上野戦争（戊辰戦争のひとつ）で、焼失しました。現在の根本中堂は、寛永寺の子院・大慈院のあった敷地に、明治12年（1879年）、川越喜多院の本地堂を移築したものです。また、寛永寺は江戸時代から多くの子院を抱えるお寺の集合体でした。多い時は36の子院を抱えましたが、現在は19の子院となっています。

歴史探訪報告

根本中堂にて法楽（般若心経の同時読経）の後、葵の間（慶喜公・蟄居の間）の見学。その後、徳川十三代将軍家定公・温恭院とその正室天璋院・篤姫さんの宝塔（霊廟）を案内していただきました。さらに五代将軍綱吉公・常憲院の御霊廟の入口に立つ荘厳な勅額門（帰りに集合記念撮影）を入ると、常憲院宝塔だけでなく、暴れん坊将軍こと徳川八代将軍吉宗公・有徳院の宝塔も見学。これら全て一昨年までは、公開されていませんでした。東日本大震災の支援のため志納金による特別拝観がスタートしました。ただし残念ながら一般公開されていませんが、寛永寺にはとなりの厳有院の霊廟の敷地内に、四代将軍家綱公・厳有院、十代将軍家治公・俊明院、十一代将軍家斉公・文恭院があります。徳川歴代15将軍のうち6人の御宝塔があります。

ちなみに、徳川家康公（安国院 東照大権現）は日光東照宮に、三代将軍 家光公（大猷院）は日光輪王寺に、二代将軍 秀忠公（台徳院）、六代将軍 家宣公（文昭院）、七代将軍 家継公（有章院）、九代将軍 家重公（惇信院）、十二代将軍 家慶公（慎徳院）、十四代将軍 家茂公（昭徳院）は、増上寺にそれぞれ御霊廟があります。そして、歴代将軍のうち、十五代将軍慶喜公は唯一、徳川霊廟に葬られませんでした。寛永寺飛び地の谷中霊園の南の端にあります。